

【研究ノート】

食品選択に関する行動経済学の一考察

大石 敦志*

- | | |
|--------------------------|--|
| 1. 課題の設定 | 5. Hanemannの効用差モデル(The Utility Difference Model) によるロジットモデルの計測 |
| 2. 記述合理性 | |
| 3. 食品選択行動別にみる時間選好率と危険回避度 | 6. 今後の課題 |
| 4. アンケート調査の概要と結果分析 | |

1. 課題の設定

現在、様々な情報や知識が氾濫し、それにより人々の関心は高くなるものの、実際の行動になかなか結びつかず、矛盾を生んでいることがある。たとえば、今年度を象徴する夏の衆議員選挙では事前の有権者の投票意識と実際の投票率では大きな差が生じ、タバコの危険性の認識と実際の喫煙行動などにも差がでている。本稿のテーマに関していえば、調査をすれば輸入農産物や遺伝子組換え食品の不安への意識は高いものの、実際の購買行動となると必ずしもその思いと一致しているとはいえないし、肥満を例に取れば多方面でその危険性は伝えられているが、その情報量に比例するほどメタボリックシンドローム数が減っているとは思えない。

危険な状態が続くからこそマスコミ等で取り上げられ話題になる、ということも考えられるが、元来人間は、目の前の感情や快楽を優先させて、将来の効用損失や健康を害してしまう傾向も見受けられるのも事実である。たとえば健康と税金との関係をみれば、人々の行動が、現在の医療保健システムの存続を危うくし、結果的に社会的余剰を減らすことになる。これも眼前にある自己の医療を過剰に優先するため、そのことが後の社会的負担の増加とは結びつけられない思考が存在しているように思える。

*当学科専任講師（おおいし あつし）

Key Words：1）嗜癖、2）記述合理性、3）行動経済学

1）Addiction、2）Descriptive Rationality、3）Behavioral Economics

そこで本稿では、これらの意識と行動の差を合理的に説明するため、行動経済学の理論を援用し、経済学的合理性と記述合理性との関係を明らかにしていく。具体的には、学生へのアンケート調査結果を分析することにより、回答者の食品選択や食習慣の意識と行動を、時間選好率や危険回避度を計量的に把握することによって、課題へ接近していく。

2. 記述合理性

一般に経済学では、主体は経済理論に従って効用や利潤を最大化するように合理的に行動するホモエコノミクス（経済人）を仮定している。しかし、実際のわれわれの行動はこのような完全合理性に対してズレを生じることがある。このズレを説明した概念として、サイモンが1947年に提唱した限定合理性というものがある¹⁾。限定合理性とは、経済主体が合理的であろうと意図するけれども、認識能力の限界によって、限られた合理性しか持ち得ないことをいい、簡単に言えば、人間の意志決定には知識と計算能力に限界があるということである。

その後、カーネマンらは、経済学に心理学のヒューリスティックス（答えの精度は保障しないが、ある程度のレベルで正解に近い解を短時間に得ることができる方法）の考えを取り入れ、それが今日の経済心理学（economic psychology）もしくは行動経済学（behavioral economics）の端緒となった²⁾。ヒューリスティックスには、想起しやすい事柄や事項を優先して評価してしまい意思決定を行う利用可能性ヒューリスティック（availability heuristic）や、特定のカテゴリーに典型的と思われる事項の確率を過大に評価してしまい意思決定を行う典型的ヒューリスティック（representative heuristic）、最初に与えられた情報を基準としてそれに調整を加えることで判断し、最初の情報に現れた特定の特徴を極端に重視してしまい意思決定を行う係留と調整（anchoring and adjustment）などがあるといわれている。

その中で、とくに不確実性と時間選好の意志決定問題をとらえる場合、先の限定合理性を記述的合理性として扱うことがある。ここで記述的合理性とは、「実際の経済行動の観察から広く妥当することが認められた合理性」を指し、たとえば時間選好理論では、割引率が時間に対して一定であることが経済学的に合理的であるが、実際の経済行動では目の小さな利得を将来の大きな利得より過度に優先される例が観察されるという事象をいう³⁾。

3. 食品選択行動別にみる時間選好率と危険回避度

ある物質や行動を極端に好む性向を嗜癖（アディクション）という。簡単にいうと、わかっていてもやめられない、という行動のことで、ニコチンやアルコールなどの物質的嗜

癖と、浪費やギャンブルなどの行動的嗜癖とに区分される。近年では、不健康な食生活の結果としての肥満が社会問題となっている。食品の正しい知識やダイエットは、いうなれば、不健康な食生活というアディクションを修正する行動ととらえることができる。

たとえば、内臓脂肪型肥満があって脂質、血圧、血糖のうち2つ以上数値が基準を上回る場合にはメタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）といい、動脈硬化性の疾患や生活習慣病の発症リスクが高くなるといわれている。肥満へとつながる行動は、時間上の選択とリスクの下での選択という2つの意思決定問題としてとらえることができる。前者は、肥満的行動の嗜好性が強い場合、それが満たされることによってある一定の効用が得られる一方で、医学的にそのような生活習慣は健康を損ない、将来の効用を著しく低下させる可能性がある。言いかえれば、肥満的生活習慣は現在のわずかな効用と将来の大きな効用の間の選択問題といえる。後者は、肥満的生活習慣がすべての人に等しく病気の危険性を与えるというわけではなく、疾病の発現の仕方はその人の持つ遺伝的特徴やその他の要因等により大きく異なってくる。つまり生活習慣で命を落とす人もいれば、同じような生活習慣でも長寿を全うする人もいるのであって、要はそのリスクをどのように判断するかという選択の問題である。

時間上の選択を考える上では、時間選好率を指標として用いることができる。たとえば、今すぐX万円もらえる満足度とZ年後にY（ $Y > X$ ）万円もらえる満足度が等しいとき、効用曲線を線形とすれば、以下の(1)式が成り立つ。

$$X\text{万円の効用} = Y\text{万円の効用} / (1 + T)^Z \quad (1)$$

この(1)式のTが時間選好率であり、この値が高いほどX万円の効用が高くなり、より目の前の選好が強いということとなる。

リスクの下での選択を考えるには、クジとその確率とから導き出される危険回避度を指標として用いる。たとえば、クジの賞金をA、当たる確率をp、そのクジの付け値をBとすると、危険回避度は以下の(2)式で求めることができる。

$$\text{危険回避度} = (pA - B) / \left(\frac{1}{2}(pA^2 - 2pA + B^2) \right) \quad (2)$$

上記の(2)式で計算される危険回避度は、大きいほど危険回避的であり、逆に小さいほど危険愛好的と解釈できる。

肥満的生活習慣をしてしまう人とそうでない人では、この時間選好率と危険回避度の値

には差異が出るのが仮定できる。すなわち、肥満的生活習慣をする人は、将来の大きな効用より目の前の小さな効用を選好するので、時間選好率は大きくなることが想定され、またこのような人は、確実な小さな利得より不確実な大きな利得を選好するので危険回避度はより小さいことが想定される。

4. アンケート調査の概要と結果分析

分析対象の学生へのアンケートの概要を表1に、その記述統計を表2に示している。これを簡単に要約すると、

- 1) 回答者246名のうち、男性が122、女性が124とほぼ半数であった。
- 2) 食品の購入頻度は高く、国産品や国産原料、商品情報（ラベル・賞味期限など）の意識も高い。
- 3) 約半数がダイエットをしたことがあるが、そのうちの半分以上が途中で止めている。
- 4) 健康や肥満に対する意識は高いが、約6割がその意識と生活習慣が一致していない。
- 5) 食の安全や地産地消への関心は高いが、現在それが直接購買行動につながっていない。
- 6) 全体のAHPの重要度では、食品の安全が0.48と最も高く、つぎに食品の価格の0.33、最後に食品のブランドの0.19の順であった。
- 7) 全体として、時間に対して選好する傾向が、危険に対して回避する傾向が高かった。と整理される。

そこで次に、2の記述合理性に従い、アンケート結果から時間選好率と危険回避度を計測し、行動別に整理した表3からこれらの関係をみていく。

まず肥満的生活習慣と時間選好率との関係をみると、全体として回答者は時間選好率が高く、直前の効用の選好が高い傾向がみられたが、とくに、高い意識があり、行動するグ

表1 アンケート調査の概要

実施日	平成21（2009）年12月14日（月）
実施場所	食品経済学科 地域食品企業論 講義内
アンケート回答者	246名（8学科、2～4年生）
主な質問事項	・食品購入頻度
	・国産品の意識度
	・表示ラベル等の意識度
	・ダイエット体験
	・肥満的生活習慣
	・地域農産物等への関心
	・食と健康との認識
	・食品購入の際の重要度（AHP）
	・時間選好の設定
	・危険回避の設定

表2 アンケートの記述統計

◆性別

選択肢	回答数	割合
男性	122	49.6%
女性	124	50.4%
計	246	100.0%

◆食品の購入頻度

選択肢	回答数	割合
よくする	188	76.4%
時々する	49	19.9%
ほとんどしない	7	2.8%
まったくしない	1	0.4%
無回答	1	0.4%
計	246	100.0%

◆国産品の意識

選択肢	回答数	割合
よくする	64	26.0%
時々する	75	30.5%
ほとんどしない	72	29.3%
まったくしない	35	14.2%
計	246	100.0%

◆商品情報（ラベル・賞味期限）の意識

選択肢	回答数	割合
よくする	132	53.7%
時々する	85	34.6%
ほとんどしない	23	9.3%
まったくしない	4	1.6%
無回答	2	0.8%
計	246	100.0%

◆商品情報の改正

選択肢	回答数	割合
現状で十分	152	61.8%
表示が多すぎる	33	13.4%
工夫不足	40	16.3%
わからない	20	8.1%
無回答	1	0.4%
計	246	100.0%

◆1週間以上のダイエット有無

選択肢	回答数	割合
ある	66	26.8%
ダイエットをしたことがない	110	44.7%
続かなかった	70	28.5%
計	246	100.0%

◆肥満に対しての意識と行動

選択肢	回答数	割合
意識あり・行動なし	13	5.3%
意識なし・行動なし	28	11.4%
意識あり・行動あり	143	58.1%
意識なし・行動あり	61	24.8%
無回答	1	0.4%
計	246	100.0%

◆地産地消への関心

選択肢	回答数	割合
かなりある	52	21.1%
少しある	113	45.9%
あまりない	70	28.5%
地産地消の意味が不明	11	4.5%
計	246	100.0%

◆地域食品の意識と行動

選択肢	回答数	割合
意識あり・行動あり	32	13.0%
意識あり・行動なし	139	56.5%
意識あり・将来行動あり	50	20.3%
意識なし・行動なし	25	10.2%
計	246	100.0%

◆食と健康について

選択肢	回答数	割合
密接に関係	225	91.5%
あまり関係ない	8	3.3%
無意識・不明	13	5.3%
計	246	100.0%

◆商品価格（A）と商品ブランド（B）との重要度比較

選択肢	回答数	割合
Aの方がかなり重要	24	9.8%
Aの方が重要	53	21.5%
Aの方がやや重要	81	32.9%
同じくらい	45	18.3%
Bの方がやや重要	33	13.4%
Bの方が重要	8	3.3%
Bの方がかなり重要	0	0.0%
無回答	2	0.8%
計	246	100.0%

◆商品価格（A）と商品の安全性（C）との重要度比較

選択肢	回答数	割合
Aの方がかなり重要	7	2.8%
Aの方が重要	12	4.9%
Aの方がやや重要	30	12.2%
同じくらい	63	25.6%
Cの方がやや重要	57	23.2%
Cの方が重要	43	17.5%
Cの方がかなり重要	32	13.0%
無回答	2	0.8%
計	246	100.0%

◆商品ブランド（B）と商品の安全性（C）との重要度比較

選択肢	回答数	割合
Bの方がかなり重要	4	1.6%
Bの方が重要	11	4.5%
Bの方がやや重要	17	6.9%
同じくらい	43	17.5%
Cの方がやや重要	55	22.4%
Cの方が重要	67	27.2%
Cの方がかなり重要	47	19.1%
無回答	2	0.8%
計	246	100.0%

◆1ヶ月後の2万円の価値（自由回答）

回答範囲	回答数	割合
3万円未満	58	23.6%
3万～5万未満	85	34.6%
5万～10万未満	62	25.2%
10万円以上	38	15.4%
無回答	3	1.2%
計	246	100.0%

◆10%で5万円が当たるくじへの値付け（1項選択）

回答範囲	回答数	割合
0円～100円	42	17.1%
101円～999円	92	37.4%
1000円～5000円	86	35.0%
5001円以上	25	10.2%
無回答	1	0.4%
計	246	100.0%

表3 時間選好率と危険回避度との関係

肥満的生活習慣の意識と行動	時間選好率	危険回避度
意識あり・行動なし	1.931	0.328
意識なし・行動なし	18.796	0.492
意識あり・行動あり	47.729	0.238
意識なし・行動あり	18.765	0.357
無回答	1.500	0.626
総計	34.645	0.422

地域食品の意識と行動	時間選好率	危険回避度
意識あり・行動あり	1.569	0.315
意識あり・行動なし	13.373	0.476
意識あり・将来行動あり	131.542	0.393
意識なし・行動なし	1.466	0.317
総計	34.645	0.422

食と健康	時間選好率	危険回避度
密接に関係	15.481	0.443
あまり関係ない	1.938	0.146
無意識・不明	386.462	0.223
総計	34.645	0.422

ループと意識はあるものの行動しないグループの平均時間選好率は1.931と47.729と大きな差が生じた。これは仮定と整合するものであり、意識が高くその意思に従い行動する回答者は、将来的な大きな効用に選好が高いことが分かる。それに対して、意識はあるものの行動が伴わないことがあるアディクションを持つ回答者は、目の効用への選好が高いといえる。

肥満的生活習慣と危険回避度との関係をみると、こちらも全体として危険回避度は高く、全体として回答者のリスクへの意識は高いと推察される。そのような中でも、意識はあるものの行動が伴わないアディクションを持つ回答者の危険回避度は0.238と低く、相対的に危険愛好性があると推定され、意識があり行動も伴っている回答者のそれは0.492と高くなっている。このことから、全体としては危険回避度が高いものの、肥満的生活習慣と危険回避度に関する仮定と整合的であるという結果が得られている。

同様に、地域食品の意識と行動の差で分けたグループと時間選好率と危険回避度の関係をみると、今は購入しないが、将来収入が増えたら購入したいという回答者の時間選好率が131.542とかなり高くなっている。それに対し、高い意識を持ち今現在購入行動している回答者の時間選好率は1.569と低く、これも経済行動学上整合的であるといえる。他方、危険回避度との関係は、必ずしも明確ではない。危険回避度の値をみると、意識はあり購入している回答者の値（0.315）より、意識はあるものの価格次第で行動という回答者の値（0.476）のほうが、高くなっており、アンケート設計段階の仮説とむしろ逆の結果となっている。これはAHPによる重要度比較をみると、意識はあるものの価格次第という

回答者は比較的価格の重要度が他のグループより高い傾向が見られる。このことから、安全志向の高い商品や地域食品の持つ効用よりも、これらの商品は価格が高いという意識を強く持つため、より多くの貨幣を失うというリスクが影響していると推察される。

最後に食と健康に対する回答で分けたグループと時間選好率と危険回避度の関係をみると、食と健康に密接な関係があると意識しているグループの危険回避度は0.443であり、それに対してあまり関係ないと思っているグループのそれは0.146と小さく、より危険愛好的であり、行動経済学上整合的であった。他方時間選好率との関係をみると、食と健康が密接に関係しているグループの値が15.481であるのに対し、あまり関係ないグループのそれが1.938と、整合性があるとは言えない結果となった。ただしこれも現在の食が直ちに今の自分の健康に影響する志向が強いほど、時間選好率は高くなるため、より食と健康を身近な問題ととらえている回答者が多いことが影響していると解釈できる。

5. Hanemannの効用差モデル (The utility Difference Model) によるロジットモデルの計測

4では記述的に選択行動と時間選好率、危険回避度との関係をみたが、必ずしもそれだけが行動を規定しているわけではない。そこで次に、回答者の属性を含めた複数の変数により、選択行動を明らかにしたい。このような被説明変数がある設問に対して、行動するかしないか二肢選択方式の場合、Hanemann (1984) の効用差モデルが多く用いられ、医療分野や環境評価分野など多方面で成果を得ている。本稿のケースでも行動の有無による効用差がその行動を規定するという仮定に立っており、このモデルを援用する⁴⁾。

効用差モデルの具体的な推定方式は以下の通りである。

回答者が事象Tを受入れ行動し、評価対象財が増加したときの効用水準と、行動せず、増加しなかったときの効用水準との差を $dv(T:S)$ とする。ただし、ここで S は回答者の属性や特性を示すベクトルである。この $dv(\cdot)$ の関数型を次の(3)式のように対数型として特定する。

$$dv(T:S) = a_0 + b_0 \ln T + \sum b_i \ln S_i \quad (3)$$

ただし、 a_0 、 b_0 、 b_i はパラメータである。

そして、ある事象が発生する確率を P とすれば、そのオッズは $P/(1-P)$ 、ロジットは $\ln P/(1-P)$ で表される。このロジットモデルにより、受け入れるかどうかの質的選択モデルを定式化すると(4)式となる。

$$P = \left[1 + e^{-dv(T:S)} \right]^{-1} \quad (4)$$

被説明変数 P は、行動する場合は1、行動しない場合は0となる確率変数である。この(2)式を推定すれば、回答者の効用の期待値 ($E(x)$) と、回答者の属性や特性との関係を示す(5)式の関数が推定できる。

$$E(x) = \int_0^{\infty} \left[1 + e^{-dv(T:S)} \right]^{-1} \quad (5)$$

この(5)式を計測すれば、設問に対する予想される回答（予想オッズ）が推定できる。

そこで、AHPによる整合度および整合比が0.15以上となってしまった回答者を除いた234人について⁵⁾、これらの式に従い今回のアンケートの肥満的生活習慣、地域食品の意識と行動、食と健康との意識に関しての計測を行い、その結果を表4に示した⁶⁾。この表をみると、まずモデルの当てはまり度を示す対数尤度をみるとその値は-56.6~-90.8とまずまずの計測結果が得られた。次に、p検定で1%および5%有意水準を通過した変数との関係を見ると、まず肥満的生活習慣では、購入頻度が高く、国産品や国産原料への意識も高く、かつ危険回避度が高い人ほど、肥満的生活習慣を避ける傾向にある。とくに危険回避度のパラメータは1.18と高く、食習慣に大きな影響を与えていると予測できる。次に地域食品の意識と行動では、国産品や国産原料への意識が高く、かつ食品の情報意識が高く、肥満的生活習慣を避け、時間選好率が高い人ほど、地域食品への意識が高く、購入

表4 ロジットモデルの推定結果

サンプル数 対数尤度	肥満的生活習慣		地域食品の意識と行動		食と健康との意識	
	234 -90.7581		234 -68.8275		234 -56.6144	
変数	推定値	標準誤差	推定値	標準誤差	推定値	標準誤差
購入頻度	-0.8620	0.3300 **	-0.5706	0.3879	-0.1908	0.4116
国産意識	1.1014	0.3604 **	1.6341	0.4607 **	-0.5114	0.4384
情報意識	0.1240	0.2820	1.0300	0.3869 **	0.3245	0.3825
ダイエット体験	0.0373	0.2861	0.2604	0.3234	-0.2782	0.3888
性別	0.7772	0.4454	0.3804	0.5099	0.2197	0.6476
時間選好	0.0003	0.0012	0.0458	0.0676 *	-0.0011	0.0008
危険回避	1.1798	0.5951 *	0.8889	0.7149	1.7436	0.7253 *
肥満行動	-	-	0.5882	0.2755 *	0.0248	0.3507
地域食品意識	0.3189	0.2530	-	-	-0.2203	0.2976
食と健康の意識	0.0367	0.4106	0.6212	0.6375	-	-
定数項	-1.9404	1.2658	-6.2600	1.8440 **	3.2888	1.8069 *

注：**1%有意水準 *5%有意水準

行動がともなう結果となった。これらも時間選好率以外は、経済学的に整合性があるといえる。食と健康との意識では、危険回避率の変数だけが0との有意差があった。これは危険回避率が高い人ほど、食と健康とに密接な関係があると意識していることを示し、興味深い結果が得られた。

6. 今後の課題

本稿でみたように、時間選好率と危険回避度の大小が肥満的生活習慣や食品選択を規定しているわけではないが、肥満的生活習慣と、食と健康との意識は、危険回避度との関係性が、また地域食品の意識と行動と、時間選好率との関係性があることがそれぞれ明らかとなった。これらは決して目新しい発見ではなく常識の範囲内のことであるが、行動経済学上の仮定をある程度裏付けることができたという点では研究の一つの始まりであり、また経済学的合理性と記述合理性にギャップを踏まえて、わが国のフードシステム全体を見ていく必要があると思う。なお本稿の分析では、肥満のような比較的わかりやすい題材については、回答者が混乱することなく回答しているが、地域食品についてのような認識が一定していない題材に関しては回答に若干の混乱がみられた。食品経済学が直面するいくつかの課題は、単純なアンケートではその究明にたどり着けない課題も多い。たとえば、食品の価格の問題にしても、安価なだけが消費者利益につながらず、長期的にみれば、低価格志向がわが国の農業や食品製造業を疲弊し、最終的に消費者に大きな負担となって返ってくる問題なども解明すべき課題である。これらの課題に対し、行動経済学が果たす役割は小さくないと感じる。

注

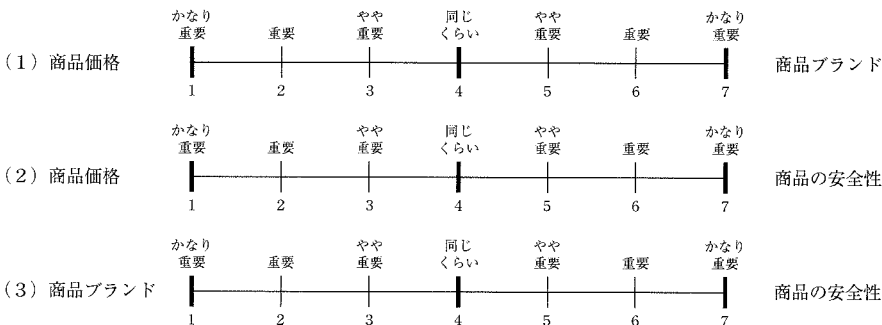
- 1) Simon, H. A. (1947): *Administrative Behavior*, MacMillan や Simon, H. A. (1982): *Models of Bounded Rationality*, MIT Press を参照のこと。
- 2) Kahneman, D. and A. Tversky (1979): *Prospect Theory*, *Econometrica* 47, pp.263-291.
- 3) 依田高典・後藤励・西村周三『行動健康経済学』日本評論社、2009年に詳しく説明されているので参照してほしい。
- 4) Hanemann, W. Michael (1984): *Welfare Evaluations in Contingent Valuation Experiments with Discrete Responses*, *American Journal of Agricultural Economics*, 66, pp.332-341.
- 5) AHP (Analytic Hierarchy Process 階層化意志決定法) とは、多基準の選択問題があるとき、これを目標・評価基準・代替案の階層構造に整理したうえで、各階層における要素同士の相対的な重要度を回答し、最適な評価・選択を図ろうという意思決定手法である。本稿では、各要素の重要度の計測だけではなく、整合性の観点から導き出される整合比の数値を用いて、矛盾回答を除去するこ

とにした。なおAHPの詳細については、八巻直一・高井英造『問題解決のためのAHP入門 Excelの活用と実務的例題』日本評論社、2005年等に詳しく解説されているので参照してほしい。

- 6) たとえば表示ラベルや賞味期限（消費期限）の確認と現在の表示に対する意見などのように変数間の相関が高いものに関しては、多重共線性を防ぐために、変数の統合を行って計測をしている。

付表 アンケート票

- 問1. あなたはよく食品（嗜好品を含む）を購入しますか。
 1. する 2. 時々する 3. ほとんどしない 4. まったくしない
- 問2. あなたは食品の購入の際、国産品（国産原料）と輸入品（輸入原料）を意識しますか。
 1. する 2. 時々する 3. ほとんどしない 4. まったくしない
- 問3. あなたは食品の購入の際、表示ラベルや賞味期限（消費期限）を意識しますか。
 1. する 2. 時々する 3. ほとんどしない 4. まったくしない
- 問4. あなたは現在の食品表示ラベルや賞味期限（消費期限）の表示をどう思いますか。
 1. 現状のままで十分 2. 表示が多すぎる 3. 情報や工夫不足 4. わからない
- 問5. あなたは過去にダイエットを1週間以上したことがありますか。
 1. ある 2. ダイエットをしたことはない 3. 試みたが長く続かなかった
- 問6. 「太る」と思われている食行動（甘いものや脂肪の多いものの大量摂取や夜遅い食事など）についてのあなたの意識と行動は
 どうか。
 1. 高い意識があるので、そのような行動はしない
 2. そのような意識はないが、そのような行動もしていない
 3. そのような意識はあるが、ついつい食べてしまう（わかっているが、やめられない）
 4. あまり深く考えず、好きなときに好きなものを食べている
- 問7. あなたは地産地消に関心がありますか。
 1. かなりある 2. 少しある 3. あまりない 4. 地産地消の意味がわからない
- 問8. 安全志向の高い商品や地域食品に対して、あなたの意識と行動はどうか。
 1. 応援しているので、少し高くても買う
 2. 応援したいが、高ければ買わない
 3. 今は買えないが、将来お金に余裕ができたなら、優先的に買いたい
 4. 特別意識していないので、他の商品と同じ扱い
- 問9. あなたは食と健康についてどのように考えていますか。
 1. 普段の食事と健康には密接な関係がある
 2. 世間が言うほど食事と健康には関係がないと思う
 3. 特別意識していない・わからない
- 問10. あなたの性別は
 1. 男性 2. 女性
- 問11. 一般に、食品を購入するときには、その商品の価格や知名度、ブランド、安全性、食味などの情報にもとづき、所持している
 予算との兼ね合いで、効用（満足度）が最大になるように行動していると考えられます。そこで、商品価格とブランドと
 安全性の3つをそれぞれ比較したとき、あなたにとって、どちらの方がどのくらい重要な要因となると思いますか。左右の
 項目の重要度を比べて、下の（1）～（3）について重要度合いを示す番号を1つ選んで○をして下さい。



- 問12. あなたは今日、2万円もらうことができるとします。ただし、もし今日お金をもらわずに1ヶ月間待つのであれば、2万円
 より多くのお金をもらうことができます。少なくともいくらもらえるなら1ヶ月間待ちますか？

今日、2万円ももらえる⇒⇒ _____ 円もらえるなら私は1ヶ月間待つても構わない

- 問13. 10%の確率で5万円があたるクジがあるとします。
 このクジが1000円で売っていれば、あなたは買いたいと思いますか？

1. 買う
 _____ クジの値段が上がっていくとします。いくらまでなら買いたいと思いますか？
 あなたが出してもよいと思う最高の金額を書いてください。 _____ 円

2. 買わない
 _____ このクジの値段がいくらまで安くなったらこのクジを買おうと思いますか？
 _____ 円